

島根大学・寧夏大学の研究交流 の歴史と国際共同研究所

島根大学・寧夏大学国際共同研究所
井口隆史

はじめに

- 中国西部は荒漠化・表土流失等が厳しく、生態環境と農村部の貧困が、悪循環を描く広大な地域である。
- この地域に対する対策の成否が地球環境問題と世界の食糧危機の将来をも左右する重要な位置にある。
- その西部に立地しているのが本研究所である。
- 本研究所は、西部の変化に日常的に接することによって、誰よりも詳しく観察できる有利さを持っている。

中国政区

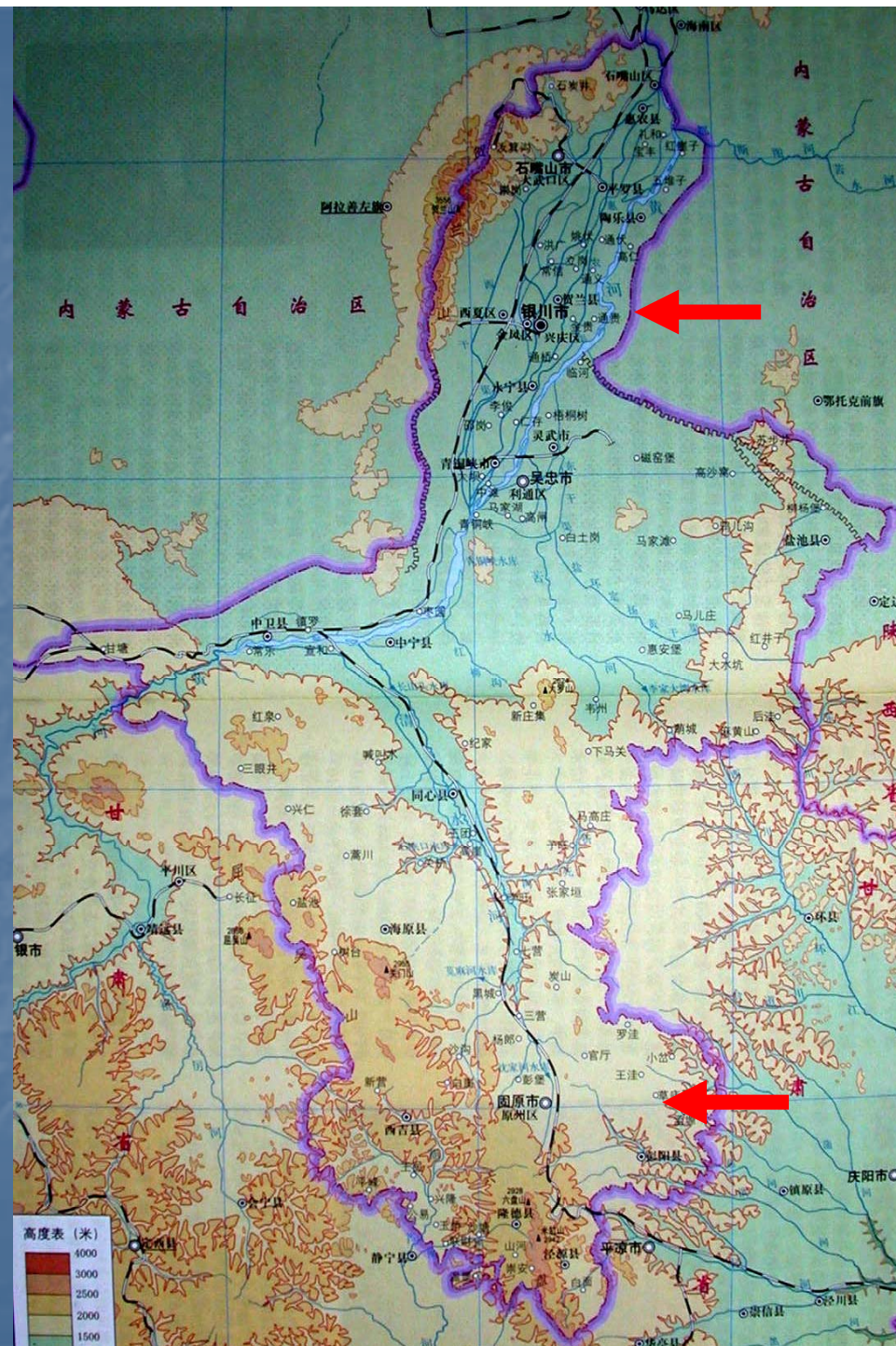
比例尺 1:22500000

0 225 450 675千米



寧夏回族自治区の位置と地形





本日の講演では、以下の5点についてお話ししたい。

- 1. 研究交流の歴史
- 2. 国際共同研究所の設立とその後
- 3. 国際共同研究所について
- 4. 中国現地研究所での経験
- 5. 将来の夢と課題

1. 研究交流の歴史

図1 研究交流等の歴史

[illegible]



第1期:1987～1996年度

〔限定的研究交流・不十分な共同研究〕

- 生物資源科学部の特定分野の少数の研究者による研究交流が中心であった。
- 研究内容も「黄土高原地域(寧夏南部山区)の農林畜産業」を中心とする研究に限定されていた。
- 日中双方の研究者が、それぞれの関心に従って個別に研究を進めるという段階に留まり、共同研究としては不十分であった。

◎その主たる原因は、研究費の調達が、1990年前後の2年間に限定されていたことによる。



〔第1期の成果〕

- 1990年11月：島根県等主催の『環日本海シンポジウム』への参加・講演（中国側5人、日本側5人）（於、松江市）
- 1995年 7月：『中国・黄土高原地域開発研究論文集』（地域開発政策日中国際共同研究グループ）の刊行

第2期:1997～1999年度

〔参加研究者の広がり・研究交流の拡大〕

- 参加学部・参加研究者の増加、研究分野の拡大。
 - 研究対象が、寧夏南部山区から日・中・韓3国の過疎問題の比較調査に拡散。
 - 3国にまたがる国際的な共同研究の可能性あり。
 - しかし、共同調査研究は、初歩的な段階に留まる。
-
- 一方、1997年には島根大学と寧夏大学との大学間交流協定が締結。
 - それまでの断続的な学術交流から、恒常的かつ多面的な交流へと発展する。

〔第2期の成果〕

- 1999年3月 : 国際シンポジウム「環日本海地域における中山間地域問題の国際比較—中山間地域対策の新たなあり方を考える—」の開催（於、島根大学）
- 1999年3月 : 研究成果報告書『環日本海諸国における過疎問題の比較調査—韓国・中国・日本を中心に—』の刊行

第3期：2000～2005年度

〔研究交流の充実、国際共同研究所の設立〕

- 関係研究者の努力の成果が現れはじめる。
- 研究交流は密になり、共同研究も軌道に乗るようになる。

× × × × ×

- その契機となるのが、中国政府の西部大開発プロジェクトによる退耕還林政策である。

- 西部大開発プロジェクト始まる。
- 寧夏南部山区の社会経済的发展と生態環境の回復・形成の同時的実現という課題が、共同研究の明確なテーマとなる。
- 中国側で、プロジェクト研究「中国寧夏南部山村地域における生態環境建設と社会・経済発展に関する実証的研究」(2000年度～2003年度)が組織され、共同研究として島根大学の研究グループに参加要請。
- これを受けて、島根大学から4人が参加。
- 初めて実質を持つ国際共同研究体制が組まれる。

- このプロジェクト研究の過程で、2003年度から日本学術振興会の科学研究費の助成が加わる。
- 更に、2005年度には学内研究助成も始まる。
- これらの影響もあり、医学部及び生物資源科学部の自然科学部門の研究者の参加が実現する(島根大学は、島根医科大学と合併し、医学部が加わる。従来の4学部が5学部になる)。
- 一方、2003年度末には、島根大学・寧夏大学国際共同研究所が設置され、2005年秋には、JBIC(日本国際協力銀行)の円借款事業(中国内陸部人材育成事業)により、新しい研究棟が完成する。
- 両大学間の共同研究等を進める基盤が確立。

〔第3期の成果〕

- 2004年7月：陳育寧主編『綠色之路—寧夏南部山区生態重件研究—』（中国側）の刊行
- 2005年：『寧夏大学学報（人文社会科学版）』第27卷1号に島根大学研究者の3論文（中文）を掲載
- 2005年12月：島根大学・寧夏大学国際共同研究所落成記念国際シンポジウム「東アジアにおける社会発展と環境のあり方を考える」開催（於、松江市）
- 2006年3月：東アジア「条件不利」地域研究会編『東アジアにおける農村の発展と環境』の刊行

第4期：2006～2007年度

〔学内資金による現地研究員の派遣・研究費の確保
及び国際共同研究所の活動の開始〕

- 国際共同研究所の活動が本格的に始動。
- 現地の共同研究支援体勢が整う。
- 2006年6月、島根大学から現地研究員2名
（所長兼研究員1名、研究員1名）が派遣。
寧夏大学側の4人の研究員とともに、国際共同研究所の事業が始まる。

〔第4期の成果〕

- 2007年10月：寧夏大学・島根大学学術交流20周年記念国際シンポジウム「寧夏農業発展問題」開催（於、中国・寧夏大学）
- 2007年10月：陳育寧・保母武彦主編『20年学術交往—中国寧夏大学日本島根大学的合作交流—』（寧夏人民出版社）の刊行
- 2008年4月：保母武彦・陳育寧編『中国農村の貧困克服と環境再生—寧夏回族自治区からの報告』（花伝社）の刊行
保母武彦・陳育寧編『島根・寧夏学術交流の20年』（島根大学、島根大学・寧夏大学国際共同研究所）の刊行

第5期：2008年度～ 〔現地共同研究支援体制の確立、 若手研究者の養成始まる〕

- 研究所は、寧夏南部山区の開発や環境に関する情報を鋭意収集し、日本語訳した後、提供できるようになり、調査研究支援機能が強化された。
- 研究交流・共同研究の参加研究者も学内外に拡大。
- 研究所を通じて日中の数多くの研究者間の交流が実現しつつある。
- また、寧夏を訪れる日本の研究者は、必ずといってよいほど研究所に立ち寄るようになってきており、研究所の存在が広く認識されつつあるものと思われる。

- 更に現在、研究所は、中国西部の大学・研究機関及び研究者との学術ネットワーク形成に着手しており、中国西部の環境と開発に関する研究にとって欠かせない役割を担うべく活動を始めている。
- また、2008年度には、『アジア・アフリカ学術基盤形成事業』（日本学術振興会）に採用され、共同研究の推進とともに、若手研究者の組織的な養成が始まっている。
- 学術交流開始から21年目にして、ようやく本格的、永続的な研究交流体制が確立されつつあるといえよう。

2. 国際共同研究所の設立とその後

- 2003年は、初めての実質的な共同研究である陳プロジェクト(既述)の最終年度であり、同時に、この時期は、日本のJBICによる円借款事業「(中国)内陸部・人材育成事業」が寧夏回族自治区において進められようとしていた。
- その事業の一環として国際共同研究所建設構想が提起され、実現した。
- それが可能となったのは、島根大学と寧夏の研究者達との研究交流が既に長い実績を持っていた上、寧夏回族自治区と島根県についても既に1993年に友好県区協定を結んでおり、研修生や技術交流員の受け入れによる相互交流が進んでいたことである。

- 国際共同研究所は、両大学の共同研究のみならず地域に貢献する人材の育成をも進めるためのものである。
- 日本国際協力銀行の「内陸部・人材育成事業」における、寧夏大学の大学施設建設の一環として構想されたものである。
- したがって、施設の建設と並んで、円借款を活用した、寧夏大学・寧夏医学院(2008年10月から寧夏医科大学に名称変更)からの日本への研究者派遣・研修を受け入れるために、日本側は、島根大学、島根県立大学等、県をあげて支援することになったのである。

3. 国際共同研究所について

- 2004年3月に調印式(於、寧夏大学)が行われ、寧夏大学の既存施設内に臨時の研究所(500m²)が開設される。
- 2005年9月には、新しい研究所建物(2,794m²)が完成する。
- 2006年6月からは、日本側現地研究員(2名)が赴任し、現在に至っている。(更に日本側には、現地採用の通訳兼翻訳者をかねた研究員が1名加わる)
- 中国側研究員当初4名→5名(現在8名)









国際共同研究所の当面の研究方向

- ①条件不利地域の**経済発展問題**（寧夏南部山区に重点を置き研究する）
- ②条件不利地域の**社会発展問題**（地域の独自性及び社会全体のバランスある発展を重点的に研究する）
- ③条件不利地域の**生態保護と建設**（重点的に生態保護及び生態管理の制度とその運用について研究する）

『枠組み協議合意書』より

本研究所の寧夏回族自治区への貢献

- 2006年度実施「寧夏回族自治区水環境整備事業を活用した日中大学・自治体間協力（島根大学・島根県）」。
- この事業は、寧夏回族自治区の銀川市及び石嘴山市において、上水道施設、下水道施設及び中水道施設等の建設を行うことにより、安定的かつ安全な水供給、および水質汚濁物質の排出量の削減を図り、両市住民の生活環境の改善に寄与しようとするものである。
- 島根大学は、中水に関する調査・提言を行った。
- また、2008年度には、当該事業関係者の訪日研修を研究所の協力の下に島根大学が受け入れ、島根県や福岡市等の協力を得て日本での研修を実施している。

今後の課題

- 島根大学・寧夏大学国際共同研究所は、両校の交流実績に基づき、寧夏回族自治区南部山区の経済・社会発展問題及び生態保護・建設等に関する調査研究を行ってきた。その成果の概要は、すでに示したとおりである。
- 日本側として今後の更なる発展を目指すとき、課題は、本研究所の有利な立地条件を生かし切る総合的な戦略的展開である。

そのためには、以下の諸点の実現を
目指さなければならない。

- ①本研究所の研究体制の拡充(専任教員、専任研究員の配置)と学術ネットワーク構築の推進
- ②本研究所における研究推進の実質化の為、現地の運営委員会・両大学の連携強化
- ③本研究所における研究成果の日中両国・地域への還元と図書の刊行
- ④本研究所の安定的経済的基盤の確保
- ⑤本研究所を軸にした人材養成制度の検討と両大学協議による条件整備

ここまでのまとめ

- 研究交流の歴史から明らかなように、第1期から第2期にかけての10年余の間の研究交流の進展は遅々たるものであった。
- 研究交流が軌道に乗り、共同研究が実態を持つようになったのは、第3期2000年代に入って以降である。
- とりわけ、新研究所棟が完成し、島根大学から現地研究員が派遣されて以降のここ数年の共同研究の進展は著しい。
- その基本を支えるものが学内外からの資金であり、とりわけ、島根大学の学内資金が果たした役割は大きい。
- 潤沢とはいえない地方国立大学法人の財政事情を考えれば、今後の更なる発展には、外部資金の獲得等も含めた安定した経済的基盤の構築が不可欠である。
- そして、それをより確実にするためには、研究所の立地を活かした共同研究の成果を地道に積み上げ、その実績によって、日中両国での知名度を高めることにつきるであろう。

4. 中国の現地研究所での経験

- ここからは、中国西部地域に於いて、中国の大学との国際共同研究所を立ち上げるという貴重な経験をした中から、参考になりそうな事柄についてご紹介しておきたい。

1) 研究所での生活・勤務状況

〔寧夏回族自治区について〕（2002年現在）

- 面積51,800km²（＞九州7県42,177km²＋山口県）、人口密度110人／km²
- 気候（銀川市）平均気温10.1℃、最高気温37.7℃、最低気温－22.6℃、降水量304mm
- 総人口572万人（≒南九州4県596万人）、銀川市68万人（大銀川市133万人）
- 民族構成：漢族370万人（64.7%）、回族199万人（34.8%）、その他少数民族3万人（0.6%）

〔住まい〕

- 研究所2階のベッド、シャワー、トイレ付きのかなり広い部屋。
- 過ごしやすく快適。
- 問題は、風呂がないこと、トイレが水洗であるが詰まるという理由で紙を流せないこと程度。
- 銀川市の最低気温は -20°C 以下になるが、室内はスチームにより適度に調節されるため日本にいるより過ごしやすい。

〔食事〕

- 当初は、大学食堂から毎食配達。しかし、量が多すぎ食べきれない。量を減らすようお願いしたが、それでも食べきれず断ることにした。
- 食事の量については、町の食堂でも、われわれは「小碗」で充分だった。全体的に普通の食事の量が、日本人にとっては多すぎるように感じられた。
- 値段は、極めて安く、牛肉ラーメンが小の場合2.5元（後に3元）で、夕食もこれで充分だった。
- 色々な庶民的食べ物を食べてみたが、普段は1食5元（1元＝15円とすれば75円）～10元もあれば足りる。

〔勤務時間〕

- 8 時～12時 事務室3階(所長室) 通勤10秒？
- 12時～14時 昼食、昼寝2階の私室
- 14時～18時 事務室3階(所長室)

〔当初の仕事の状況〕

- 研究所の運営委員会をスタートさせ、双方合意の下に事業等を進める体制作り。
- 島根大学等の研究プロジェクト支援(寧夏情報等島根大学の研究者向けの情報提供開始)
- 日本からの調査の準備等寧夏側との話し合い。
- 研究所内での研究会の開催等

〔日本との連絡方法〕

- 研究所の電話：海外への発信は、そのままでは出来ない。IPカードによる、IP電話対応でのみ可能（有料のプリペイドカードで値段が高く面倒であるが、最も音声の状態が良い）
- スカイプ：機械をセットしたパソコン間のインターネットによる電話（特定の人との間の通話可能：無料だが時に音声がとぎれたり、聞き取りにくい等の問題がある）
- 有料スカイプ：スカイプを使い一般の固定電話、携帯電話へ掛けることが可能（これが安価で大変便利）
- 研究所のファックス：発信は国内のみ。受信は海外からも可能。しかし、調子が悪く、ほとんど使えない。
（後に機械を日本側の責任で別途購入し、対応できるようになる）

従って、日本との連絡は、スカイプによる電話かインターネットを通じての電子メールでのやりとりがほとんどになる。

〔インターネット環境〕

- 寧夏大学では、インターネットの使用がかなり制限されていた。
- インターネットの接続には、大学の電算機センターの許可が必要。
- 許可が出ればインターネットに接続できるが、メールが送れない、添付ファイルを付けると送れない、短い文章なら送れても、少し長い文章・写真などは送れないこともしばしばあった。
- この様な現象は、時間帯により条件が変化するので、どうしても送らなければならない添付ファイル、写真、図などの場合には、早朝か深夜に作業する。
- それでもうまく送れなくてお手上げになったことが何度もあった。（この作業のくり返しによる徒労感は、何度も経験した。）
- 工夫としては、量の多い添付ファイルは、その1、その2...等、分けて送ることですうまく送れることがある。
- 最もひどい場合は、メール作成中に、突如パソコンに警告場面が出て、インターネットが使えなくなってしまうことがある。
- この様な場合、時間をおいて再度立ち上げてやり直すことになる。

- この様に、当初は日本にいて仕事をする場合には、経験したことのないような悪条件下での悪戦苦闘の連続であった。
- われわれにとって幸運だったのは、研究所の中国側の助理研究員（日本の助手に該当）で、コンピューターに強い研究員が、何かが起こる度に助けを求めると、嫌な顔一つせず処置してくれたことである。彼のいない時には、ただ彼を待つしかなかった。
- 2年目には、民間のプロバイダーに切り替え、対応することにしたので費用はかかったが、その後は環境がかなり改善された（これも彼の示唆による）。

2) 研究所(日本側)の体制整備について

①言葉の壁と通訳兼翻訳者の雇用

2006年の6月初めに赴任した私ともう一人の研究員(神田さん)の中国語会話能力は、私は全くダメであり、最低限の挨拶程度。神田さんは、以前、寧夏大学の日本語学科で日本語教師をしていた経験があり、今回も、日常の会話程度は可能であった。

しかし、それでも日本語を全く解しない中国人との会話の場合は、うまくゆかないこともあった。

- そんな状態で、どうして最初落ち着くまでの立ち上げの時期に対応したのか(できたのか)。
- それは、生活面から研究所内での双方の業務に関する会議の内容も含め、全てを張季周先生(寧夏大学副教授、以前から交流がある、寧夏大学で最も優れた通訳)のお世話になる事ができたからである。
- これは、陳学長(当時)以下、寧夏大学側の配慮のおかげでもあったが、それを越えて個人的な好意で親身に面倒を見ていただいた。
- おかげで、1週間程度で、一通りの生活と勤務の体制はできた。(この間、研究所の張前進副所長にも研究所内での各種の配慮をしていただいた。)

- 研究所の日常的な業務の遂行については、張季周先生にいつも頼るわけにはいかない。
- しかし、張先生が不在の時に感じる言葉の壁は、日中双方にあり、最低限の意思疎通に対応が可能な通訳（兼翻訳者）が必要だということになった。
- 研究所（日本側）の使える経費はそれほど多くないので、慎重に検討を重ねた。
- 張季周先生からの情報などを参考にしながら検討した結果、予算の限られている研究所（日本側）であり、最初から能力の高い人材の雇用は困難である。
- 労力と時間を掛け育てる以外にないという結論になった。

- 具体的には、待遇等は明記せず、研究所（日本側）として、地元の新聞に通訳兼翻訳者募集の記事を掲載した。
- その費用は三日間で約3000元と馬鹿にならない金額であったが、やむを得ずお願いした。
- その結果、寧夏大学の日本語学科を卒業予定、あるいは卒業後数年という若者を中心に応募者が14人あった。各人30分程度の面接（張先生にはこれにも参加していただいた）の結果、その中から最も可能性のありそうな一人（楊玉萍・寧夏大学外国語学院日本語学科卒業予定）を選んだ。

- 7月から来てもらったが、予想通り即戦力としてすぐには役に立たなかった。
- しかし、研究所で仕事を重ねる中で、彼女は急速に通訳においても翻訳においても能力を高めていった。
- それでも複雑な内容の通訳になると対応できずお手上げであった。
- (翌年の4月からは、島根県の国際交流員に採用されることになり、交代する事になった。)

②共同研究の推進と優秀な通訳・翻訳者確保

- 研究所中国側の研究者との間の協議は、中国語以外ではほぼ不可能であったので、張季周先生がおられるときには、双方の言葉をそれぞれ通訳していただけるのであるが、いつも側にいるというわけにはいかない。文章も簡単なものやおおよその意味を理解する程度で良いものはわれわれにも対応出来ても、リアルタイムで正確な意味を理解しなければならないようなときには困ってしまう事になる。

- 例えば、現地研究所において、寧夏大学(中国)側と島根大学(日本)側とが研究所の多様な事業について協議する運営委員会での通訳や、共同研究に必要な論文などの翻訳については、知識と経験のある人材でなければ困難であった。
- 重要な会議には、豊富な知識と経験を持つ張季周先生に忙しいさなかでも時間を割いて通訳していただいたので何とか乗り切れていた。
- ところが、残念ながら、このように献身的な協力をいただいた張季周先生であったが、われわれが現地に赴任して2年足らずしかない昨年2008年3月9日に惜しくも亡くなられたのである。
- 張先生の存在なしには、立ち上げ当初の研究所の運営は、あのようスムーズに行かなかっただろうと思われる。かけがえのない人であった。

〔郭迎麗さんを迎えて〕

- 研究所にとって幸運なことに、2年目の後半から、張先生に代わるかのようにタイミング良く、郭迎麗さんが研究所に来てくださることになった。
- かつて島根大学に留学していた経験を持ち、自治区の外事弁公室での勤務経験を持つ優秀な彼女(かつて日本で国際交流員として活躍し、その後島根大学で修士号を取得)に通訳・翻訳もできる研究員として来ていただけたことになった。
- この結果、日本側は、はじめて張先生に全面的に頼らずともどんなことにも対応できる自前の体制がとれるようになった。
- 研究所のこれまでの3年弱の事業推進にとって、前半の張先生と後半の郭さんの貢献には大きなものがある。このお二人に支えられる事なしに現在の研究所(とりわけ日本側)はなかったといえる。

③調査・研究における日本と中国の違い

- 日本においては、全国・各県・市町村等の基本的データは比較的簡単に入手できる。
- 自治体に調査に行けば、どこでも地域を把握するのに必要なデータは、当然のように提供される。
- しかし、中国の場合、それが大変難しく、調査対象の自治区や県や村や集落についての資料はほとんど入手できない場合が多い。
- 依頼しておけば責任者が地域について説明してくれるのであるが、データとして入手できるのは、その中の簡単な数値のみである。

- あらかじめコピーした資料がもらえる場合はまだ良いのであるが、責任者が自分で作成したメモを読み上げるだけで、その原文が手に入らないことがある。
- このような場合、聞き取りメモに頼るしかなく、通訳が優秀な場合は何度もやりとりしておおよその理解が可能であるが、そうでない場合大変困ることになる。
- 又、断片的な数値により説明された「事実」をデータで確認しようとしても詳細なデータは無いことも多い。
- 更に、たまたまデータが見つかったとしても、聞き取りの際のデータとは一致しないこともある。
- そんなこんなで、既存のデータを利用した社会科学分野の研究は大変困難な場合が多いのである。

- 最初から、聞き取りなどはせず、既存のデータを「事実」として分析するという方法もあるが、現実にはどれだけ接近できているかは、疑問な場合も多くならざるを得ない。
- 時系列のデータは、すでに発行された統計年鑑類に掲載のものを拾い上げるしかないのであるが、そのデータが限定されており、しかも、首をかしげるような数値に出会ったりすると、どこまで信頼できるのか判断に苦しむことになる。
- 社会科学的な研究、特に農業・農村・農民などについての研究をしようとするれば、自ら農家に足を運び、そこで得た情報を積み重ねて判断する以外ないように思われる。
- （近年、統計年鑑類が整備されてきている。ようやく、データによる分析がかなりの程度可能になりつつあるように思われる。まだ日本の自治体に比べれば不十分であるとはいえ、20年以上の年月と中国社会の変化を実感する事実である。）

④中国における調査の制限について

- 研究費があり、メンバーがそろえば研究が進むというわけではない。
- 外国人の場合、南部山区の農村調査等は、内容を明らかにし、常に大学を通し、自治区政府に申請し、許可をもらう手続が必要である。
- 従って、今日時間があるから調査に向かう、というようなことはできない。
- 1～3ヶ月とか一定の時間の余裕が必要であり、内容によっては、許可が下りない事もある。

- 日本での場合なら、前日にでも担当者に直接電話で依頼しておけば、余程忙しいことが無い限り調査が可能である。
- このように彼我の差は大きい。
- 日本から年に一度くらいの頻度で調査に入っていた頃には、かなり前から調査依頼を提出し、連絡のやりとりをくり返し、許可になった範囲で調査に入っていたので、このような厳格な手続きの必要については、ほとんど実感していなかった。
- しかし、現地の研究所にいて、日本からの調査依頼を実現しようとする、内容によっては、思いがけない拒否に出会ったりして失敗する場合があるのである。
- 1年目の自動車のリサイクルに係わる解体工場の調査については、まさにそうであった。

⑤日本と中国の研究の特徴について

- 中国側の研究者が日中それぞれの研究の特徴を次のように述べている。
- 「島根大学の研究者は、寧夏大学の研究者達が経済社会発展と緊密に結びついた研究を展開し、研究成果の社会への応用を重視していることを高く評価した」。
- 一方、「寧夏大学の研究者は、島根大学の研究者がおこなう実証研究の方法、資料に対する細緻で厳密な分析と独自の見解の学風を高く評価した」。
- これは、両大学双方がそれぞれの研究について好意的見解を持っているということを表現しているように見える。

- 勿論そういう面もあるが、日本側の研究に対する、かなり本質を突いた批評だとも言える。
- 中国側から見れば日本側の研究は、時間がかかり、多くの実証データが集まらないと研究が進まない事が多く、地域社会の要望に対応できないのである。
- 中国では日本のように既存のデータが豊富になく、農家や集落の調査も簡単にはできないので厳密な実証研究として進めるのは困難なことが多いようである。
- そのような中で、地域に役立つ研究成果を出そうとすれば、どこかで割り切らざるを得ないのであろう。
- 議論の余地があるものとは考えるが、研究の方法論と成果の社会への還元のあり方にも係わる重要な指摘であると受け止めるべきであらう。

5. 将来の夢と課題

保母顧問は、将来の夢として以下の6点を上げている(『島根・寧夏学術交流の20年』171～174頁)。

- ① 国際共同研究所を中国西部における国際学術交流の拠点に
- ② 学術交流のネットワークを、寧夏から広域の西部に広げること
- ③ 寧夏研究と結合した人材育成の推進
- ④ 日中の国際的産業連携事業の推進
- ⑤ 「アジア農村国際学会」(仮称)の創設
- ⑥ 島根と寧夏の交流事業との連携、便宜

- これらが実現すれば大変すばらしいし、是非実現したい。
- しかし、私は別の夢を持っている。

〔私の夢〕

- 私は、寧夏南部山区が、「黄土の大地」から、緑の多い、森林や草地に覆われた豊かな山村に代わっていく事を夢見ている。現実には、南部山区には、豊かな森林を持った地域（六盤山森林公園）があり、それを習って実現できないことはないだろうと考えている。
- 私の夢の中の森林は、循環的に伐採・利用され、林間放牧も行われている。森林によって保護された農地には、豊かに作物が実っている。降水も適度にあり、飲み水にも困る事はない。
- 1980年代に行われたWFPによる「階段造林」事業は、いったんは成功した。しかし、その後農民達によって伐採され失敗に終わってしまった。

- しかし、今世紀に入り、大々的に進められた退耕還林還草事業においては、確実に緑が増えている。
- そのための努力も膨大なものがある。
- いろいろ問題があるとしても、寧夏での退耕還林還草は、一定の成果を上げつつある事は確かである。
- 今後も適切な政策がとられれば、今後50年100年先には緑の多い豊かな地域が現れているかもしれない。
- それを実現すべく、研究所として全力を挙げて取り組み、長い時間を掛けても、実現への努力を続けていきたい。

〔課題〕

- 研究所は、日中の多くの人々の支援の下に現地に研究者を派遣し、既に3年近くが過ぎた。
- この間、日中双方の大学だけでなく、県と自治区それぞれの人々に支えられて、比較的短い年月で軌道に乗るようになったと感じる。
- それでは、研究所（日本側）の活動をこのようにスムーズに進められたのはなぜなのか。
- 私は、20年間の学術交流を含めた両大学、両地域の各種の交流の中で培われた人間関係であり、その中から生まれた強い相互の信頼関係だと考えている。
- 今後更に共同研究を進める中で、相互の信頼関係を深めなければならない。

- 研究交流についてだけ考えれば、寧夏の研究者達は地域をいかにして豊かに出来るかということに取り組んでいる。
- われわれ島根の研究者も同様、いかにして地域の人々、とりわけ南部山区の人々を豊かに出来るかという問題意識で取り組んでいる。
- その点では双方、共通の目標を持っているといえる。
- それにもかかわらず、昨年末、島根大学で開かれた日中国際フォーラムの中で明らかになったことは、両国研究者の意見のずれであった。

- 島根大学側は、環境制約の下で持続可能な地域社会を実現するにはどうすればよいかという考え方を示した。
- 寧夏側は、まず地域を如何に豊かにできるか、環境問題は重視するとしても、まずどうすれば豊かになれるかを考えることが必要だという意見であった。
- 私は、このやりとりを聞きながら、1992年の地球サミットでの議論を思い出した。
- どちらも地域の人々を幸せにしたいという点では共通しているのであるが、その道筋が少し違っているということを改めて認識し、今後の両大学での議論の重要な課題だと感じた。

- 世界には、豊かさの指標をGDPから「幸せ指数」へという議論がある一方、先進諸国においても、いまだにGDPがプラスであり大きい方がよいと考える人々も多いという現実がある。
- ましてや、南部山区の貧困を間近に見ながら研究を続けている寧夏の研究者にとっては、持続可能な発展の前提として環境を、といっても簡単には理解されないであろう。
- しかし、現実には、寧夏南部山区においても、既に、環境負荷は環境容量を超えている、という研究結果が出ているのである。
- 難しいが共に乗り越えなければならない課題である。

ご静聴ありがとうございました。

多謝